## 法政大学学術機関リポジトリ

## HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-27

〈新刊紹介〉外間守善著(1)『南島文学論』(2) 『南島の神歌-おもろさうし-』(3)『南島の 抒情-琉歌-』

間宮, 厚司 / マミヤ, アツシ / MAMIYA, Atsushi

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文學誌要

(巻 / Volume)

53

(開始ページ / Start Page)

62

(終了ページ / End Page)

63

(発行年 / Year)

1996-03-24

(URL)

https://doi.org/10.15002/00019865

## 〈新刊紹介〉

- (2) (1)南島 南島文学論 の持情の
- 南島 -琉歌---| おもろさうしー

## 間 宮 厚 司

たいへん広範多岐にわたっている。そこで先 の研究の成果をまとめた大著で、 全体の構成について概観しておこう。 著者が営々と開拓してきた四○年間 その内容は

> 地域で生まれた文学の総称であると定義し、 沖縄・宮古・八重山の四つの諸島にまたがる

序 第 一章 章 呪言を伝える文学主体と南島 南島文学の全体像

0

歌謡論

神々

第四章 オモロ 琉歌論 論

第五章 組踊論

終 南島文学論

グトゥ を日本文学と関連させつつ位置づける。 内容を形態・発想の両面から分類し、 それを古代文学と近代文学とに二分し、 グチ 実証を試みる。次いで、沖縄の呪言ティルク 新な意見を提示する。 察が綿密になされ、さらに南島に現われる異 形 にすることで、折口信夫の「文学発生論」の 第一章では、南島全域の神歌や呪言の全体 れるアラ神と日本列島のアラ神について斬 の神々、沖縄の祖先神アマミク、 (呪言から叙事詩への史的変遷)を明らか (照る子口)の素性や南島に伝わるユン (誦み言)と呼ばれる呪言に関する考 加えて、 南島の神話 南島に現 それら その

> 観念 聞得大君・おなり神信仰・神女の呪力など) その特質を様々な角度から探り、分析する。 について述べ、 しても視野の広い論を展開している。 伝説を紹介し、 冒頭のオモロの思想と構造(国王を守護する と内容、 を設け、 八重山の各歌謡をそれぞれ形態別に分類し、 を明快に説き、『おもろさうし』の世界観と神 第二章では、 第三章では、 (アマミヤ・ニライ・オボツ)の問題を オモロの語義や時代背景、、その成立 諸本などの基本的な事柄を解説し、 神々の原郷・ニーラスクに関 最初に『おもろさうし』概説 その後で沖縄・奄美・宮古・ 初めに南島歌謡の源流と系譜

眼的な世界観)を読み取ろうとする。 に始まり、 種類や歌人、琉歌の表記と読み方等々の概説 ようになった由来と琉歌の成立過程、 丁寧に、そして鮮やかに解釈する。 第四章では、 続いて、代表的な琉歌を一 沖縄のウタが琉歌と呼ばれる 琉歌の 語

南島文学というものを、 奄美

序章では、

取り上げ、太陽崇拝と日子(テダコ)思想の

成立過程をあとづける。一方で、オモロに見

ても検討を加える。また、オモロの創世神話 もろさうし』の「又」記号の成立過程につい える抒情の芽ばえも指摘する。それから、『お

を構造的にとらえることで沖縄の原思想

能と組踊との関わりについても言及する。解説する。また、沖縄芸能史という観点からな分析を通して、その劇性の特質を取り出しな分析を通して、その劇性の特質を取り出し事情などの概説的な説明を先ず施した上で、事五章では、組踊とその源流、組踊の成立第五章では、組

「あとがき」で著者は次のように述べる。であるがき」で著者は次のように述べる。をれに続く南島文学の発生と南島歌謡の変容についての仮説(呪言→呪禱→叙事→抒情)についての仮説(呪言→呪禱→叙事→抒情)についての仮説(呪言→呪禱→叙事→抒情)についての仮説(呪言→呪禱→叙事→抒情)についての仮説(呪言→呪禱→叙事→抒情)についての仮説(呪言→呪禱→叙事→抒情)についての仮説(呪言→呪稿→叙事→抒情)についての仮説(呪言→呪稿→叙事→抒情)についての仮説(呪言→収書と対象が、一島の根底にある折口信夫「まれびと論」を否定を表する谷川健一説を論理的に批判している。

されているといっても過言ではない。文学研究」のエッセンスは、ここに集約だいじな章だと考えている。私の「南島終章の「南島文学論」は本書のいちばん

著者の研究はこれで完結したわけではなく、時点での到達点であり、集大成である。が、六九〇頁から成るこの研究書は、著者の現

光(輝き)を放ち続けるに違いない。 ・大は、如何なる分野においても誤りの繰りを正される部分は、将来必ず出てくるものと思われるが、たとえそうであっても、本書は思われるが、たとえそうであっても、本書は思れるが、たとえそうであっても、本書は思れるが、たとえぞうであってものとのが、から、対している。学問の既に新たなる一歩を踏み出している。学問の既に新たなる一歩を踏み出している。学問の既に新たなる一歩を踏み出している。学問の

②③はともに文庫本で、一般の読者を念頭

琉歌の心を鮮明によみがえらせる。そして、生きた時代背景を作品に投影させる手法で、精確な解釈と、作者(様々な階層の人々)の3は、一語一句を決しておろそかにしない

古典舞踊など)が盛り込まれている。に収載されていない内容(例えば琉歌と琉球も②と同様、『南島文学論』の「第四章琉歌論」することも可能。また、便利声に出して鑑賞することも可能。また、便利カタカナで琉歌の読み方を記してあるので、カタカナで琉歌の読み方を記してあるので、カ

(まみや あつし・文学部助教授)

○③一九九五年 中公文庫・九八○円○③一九九五年 中公文庫・七八○円○○円